

## 742. 確率法則ノ分解問題, IV

北川 敏男 (阪大)

吾々ハ、愈々  $K$ ノ構造ニ関スル *Khintchine*ノ基本定理 (I, §3, 定理1)ノ証明ニ移ラウ。念ノため、問題ノ定理ヲ再記スル:

定理1. (*Khintchine*) 凡ベテノ確率法則  $\mathcal{L}$ ハ必ス次ノ形ニ表ハレ得ル:  $\mathcal{L} = \mathcal{L}' \mathcal{L}''$ , 但シ、 $\mathcal{L}'$ ハ分解不可能ノ確率法則ノ有限個又ハ無限個ノ積ヲ、 $\mathcal{L}''$ ハ無限ニ分解不可能ナル確率法則ヲ表ハス。

コノ定理ノ証明トシテ、現在ニ通りノ方法が知らレテ居ル。 *Khintchine*ノ方法<sup>(1)</sup>ハ、無限ニ分解可能ヲ定義

---

(1) 前回引用セシ論文. *Lévy*, Eニ在リ。

1 (II参照) = 依ッテ定義シテ, 定理1ヲ証明シテ居リ,  
コレ = 反シテ Lévyノ方法ガハ, 無限 = 分解可能ノ定義ヲ  
I, §3ノ意味 = トツテ進ムノデアル。

コレ等ニ定義ガ同等デアルコトハ, IIノ結果(定理2)  
カラモ明ラカデアアルカラ, 結局同ジコトヲ示シタ事 = ナルノ  
ハ言フマデモナイガ, 証明ノ難易ト云フ点カラミルト, Lévy  
ノ方がズツト簡單デアアル。即チ定理1 = 関シテハ無限 = 分解  
可能 = 関スル Lévyノ定義ガ Khintchineノ定義ヲ  
リモ適切デアアルトモ云ヘル。(ソノ代リ定理2ノ証明デアハ,  
Khintchineノ方がズツト簡潔デアアル) 故ガハ先ヅ  
Lévyノ証明ヲ紹介シ(§6). Khintchineノ方ハ, 方  
針ノ説明 = 止メヨリ。(§7)

§6.1.  $\zeta(L), \eta(L)$ ノ導入 定理1ハ見  
方 = 依ッテハ, evidentノ様ナ氣モスル。Lガ無限  
= 分解可能ノ確率法則デアレバヨシ, 然ラザレバ必ズ分解  
不可能ノ因子ヲ含ムトイフコトヲ示シテ, ガンガン = なし  
崩シ = シテ行ケバ宜カラウトハ誰レモ想像スルトコロデア  
ロリ。實際 = ハ多少工夫ヲ要スル。以上ノ考ヘヲ逆行シテ  
証明ヲ完成スルタメ, Lévyハ  $\zeta(L), \eta(L)$ ナルモ  
ノヲ導入シタ。

(1)  $\zeta(L)$  = 関シテ: 確率法則  $L$ ガ與ヘラ  
レタトスル。Lヲ必ズ  $L'$ ノ素因子ナリトスル; 即チ (i)  
 $L = L'L'$ トナルヤウナ確率法則  $L'$ ガ存在レ, 且 (ii) L  
ハ單位法則 (§2) デナリ, 且ツ分解不可能デアルトスル。

$L$  のアラユル素因子  $L = \text{ツイテノ平均数縮度 } \delta(L)$   
 (§1) の上限ヲバ  $\zeta(L)$  が表ハスノデアル。即チ、  
 $L$  のアラユル素因子ノ集合ヲ  $\rho(L)$  が表ハストキ、 $\rho(L)$   
 が空集合ヲナイトキ = ハ

$$(22) \quad \zeta(L) = \text{u. b. } \delta(L) \\ L \in \rho(L)$$

ヲ定義スル。  $\rho(L)$  が空集合ナラバ、 $\zeta(L) = 0$  ト定  
 義スル。

明カニ、 $\zeta(L) \geq 0$  デアル。  $\zeta(L) = 0$  ナルコトガ、  
 $\rho(L)$  が空集合ニナルタメノ必要條件トナル。

$$(2) \quad \underline{\eta(L)} = \text{関シテ: } L \text{ ノ分解 } d: L = \prod_{n=1}^{\Delta_d} L_n$$

ヲ考ヘル。  $\Delta_d$  ハ有限デモ、無限デモヨイ。  $\bar{\delta}(d)$  ハ、  
 $\delta(L_n)$  ( $n = 1, 2, \dots, \Delta_d$ ) ノ上限ヲ意味スルトス  
 ル。 I, §2, (5), 1°ヲ参照スレバ、コノ上限ハ、何處  
 カ、 $n$  デ到達出赤ル譯デアレカラ。

$$(23) \quad \bar{\delta}(d) = \text{u. b. } \delta(L_n) = \text{Max } \delta(L_n) \\ 1 \leq n \leq \Delta_d \quad 1 \leq n \leq \Delta_d$$

(茲ニ、各  $L_n$  ハ分解不可能トハ限ツテ居ナイコトニ注意  
 セラレタイ。)

次ニ、上述ノ如キ  $L$  ノスベテノ分解ノ集合ヲ考ヘル、  
 コレヲ  $\omega(L)$  が表ハサウ。  $\eta(L)$  ハ、コノトキ、次ノ  
 如ク定義サレル:

$$(24) \quad \eta(L) = \text{l. b. } \bar{\delta}(d) \\ d \in \omega(L)$$

この定義から明らか =、次のことが見られる<sup>(2)</sup> (簡単であるから証明は略スル):

- (25)  $\left\{ \begin{array}{l} (\alpha) \quad \mathcal{L} \text{ が } \underline{\text{無限}} = \underline{\text{分解可能}} \text{ であるための必要条件は} \\ \quad \quad \eta(\mathcal{L}) = 0. \\ (\beta) \quad \mathcal{L} \text{ が } \underline{\text{分解不可能}} \text{ であるための必要条件は} \\ \quad \quad \delta(\mathcal{L}) = \eta(\mathcal{L}). \\ (\gamma) \quad \text{一般} = 0 \leq \eta(\mathcal{L}) \leq \delta(\mathcal{L}). \end{array} \right.$

§ 6.2. 補助定理 6.  $\eta(\mathcal{L}) > 0$  ならば、次の様な分解不可能な  $\mathcal{L}$  が存在スル: (i)  $\mathcal{L}$  は  $\mathcal{L}$  の素因子である; 且つ (ii)  $\delta(\mathcal{L}) \geq \eta(\mathcal{L})$ .

注意: (25), ( $\alpha$ ) を参照スルバ:  $\mathcal{L}$  が「無限 = 分解可能」な確率法則<sub>1</sub> ならば、 $\mathcal{L}$  が分解スル<sub>2</sub> の素因子  $\mathcal{L}$  が存在スルトイフことが、この補助定理から得られる。これ面白い結果トイフベキである。但し、無限 = 分解可能<sub>1</sub> 確率法則 = シテ、素因子ヲ有スルモノハ存在スル (§5, 例 4) から逆ハ成立セヌ。

補助定理 6 の証明: 正数列  $\{\varepsilon_n\}$ , ( $\varepsilon_n \downarrow 0$ ) ( $n = 1, 2, \dots$ ) が任意ニ與ヘラレタトスル。コレニ関シテ、次の<sub>2</sub> の確率法則ノ系列  $\mathcal{L}_0, \mathcal{L}_1, \dots, \mathcal{L}_n$  が定義出

(2) ( $\alpha$ ) の定義から明らかである。(I, §3 参照)

( $\beta$ ):  $\mathcal{L} = \mathcal{L}_1 \mathcal{L}_2 \dots \mathcal{L}_n$  トナレバ必ず  $\delta(\mathcal{L}_i) < \delta(\mathcal{L})$

( $i = 1, 2, \dots, n$ ) (但し勿論各  $\mathcal{L}_i$  は単位法則ヲナシ) コレカラ ( $\beta$ ) が得ラレル。

( $\gamma$ ) は以上ニヨリ明らか。

示すトスル:

$$(26) \left\{ \begin{array}{l} (i) \quad \mathcal{L}_0 = \mathcal{L} \\ (ii) \quad \mathcal{L}_\Delta \text{ハ } \mathcal{L}_{\Delta-1} \text{ノ分解因子ヲナシ、且ツ、} \Delta = 1, \\ \quad \quad 2, \dots, n = \text{對シテ} \\ \quad \quad \eta(\mathcal{L}_{\Delta-1}) \leq \eta(\mathcal{L}_\Delta) \leq \delta(\mathcal{L}_\Delta) \leq \eta(\mathcal{L}_{\Delta-1}) + \varepsilon_\Delta \end{array} \right.$$

今  $\mathcal{L}_n$  が分解不可能デアレトスル。然ルトキニハ、 $\mathcal{L}_n = \mathcal{L}$  トオケバ、

$$\begin{aligned} \delta(\mathcal{L}) &\geq \eta(\mathcal{L}_{n-1}) \geq \eta(\mathcal{L}_{n-2}) \\ &\geq \dots \geq \eta(\mathcal{L}_0) = \eta(\mathcal{L}) \end{aligned}$$

トナリ、補助定理 6 ハ成立スル。

次ニ、 $\mathcal{L}_n$  が分解可能ナリトスル。 $\eta(\mathcal{L}_n)$ 、定義カラシテ、 $\mathcal{L}_n$ ノ適當ナル分解  $\mathcal{L}_n = \prod_{l=1}^d \mathcal{L}_{n,l}$  トレバ、 $l = 1, 2, \dots, d = \text{對シテ}$ 、 $\delta(\mathcal{L}_{n,l}) \leq \eta(\mathcal{L}_n) + \varepsilon_{n+1}$  トナリ、尚モアル  $\mathcal{L}_0 = \text{對シテハ}$ 、 $\delta(\mathcal{L}_n, l_0) \geq \eta(\mathcal{L}_n)$  トナルヤウナル  $\mathcal{L}_n$ ノ分割ガアル。セシテ分解ニ依ツテ  $\mathcal{L}_{n+1} = \mathcal{L}_n, l_0$  ト定義スレバ、(26)ナル関係ハ  $\Delta = n+1 = \text{對シテモ成立ツ}$ 。 $\mathcal{L}_{n+1}$  が分解不可能デアレバ、上述ノ如クシテ推ムシ、然ラザルトキニハ、 $\Delta = n+2 = \text{對シテモ}$  (26)ガ成立ツ様ナル  $\mathcal{L}_{n+1}$ ガアル。

依ツテ結局、スベテノ自然数  $\Delta = \text{對シテ}$  (26)ナル関係ノ成立スルヤウナル確率法則ノ無限系列  $\{\mathcal{L}_n\}$ ノ存在ヲ假定シテ、コノ場合ニモ補助定理 6ノ成立ヲ示セバヨシ。

$\mathcal{L}' / \mathcal{L}_n = \mathcal{L}'_n$  ト置ク。各  $\mathcal{L}'_n$  ハ  $\mathcal{L}'_{n+1}$ ノ分解因子デアル。 $\delta(\mathcal{L}'_n)$ ハ従ツテ、凡ト共ニ増加スル(平均數

縮度増加ノ原理, §2) シカシ  $\delta(L)$  ヲ越ヘナイ。故  
 $= \lim \delta(L'_n) \leq \delta(L) < \infty$ . 従ツテ,  $\{L'_n\}$  ハアル  
 確率法則へ *quasi-convergence* ヲナス。従ツテ  $\{L_n\}$   
 モ亦然リ、 $\{L_n\}$  ノ極限法則ヲ  $L$  デ表ハサウ。

一方,  $\{L_n\}$  ノ定義カラ,  $\{\eta(L_n)\}$ ,  $\{\delta(L_n)\}$  ハ夫々, 單  
 調非減少, 單調非増加テ何ジ極限值ヲモツ。ソコデ

$$(27) \quad \eta(L_n) \leq \eta(L) \leq \delta(L) < \delta(L_n)$$

ガアル所オラサキノスベテノ  $n$  = ツイテ成立スレバ,  $\eta(L)$   
 $= \delta(L)$  トナル。又  $L$  ガ  $L$  ノ分解因子デアルユトハ明  
 カデアリ、又  $\eta(L) = \eta(L_0) \leq \eta(L_n) \leq \eta(L) =$  依  
 ヲツテ  $\eta(L) \leq \delta(L)$  トナルカラ、補助定理6ハ証明サ  
 レタコトニナル。

ソコデ, (27) ヲ示サウ。  $\eta(L) \leq \delta(L) < \delta(L_n)$   
 ハスベテノ  $n$  = 對シテ成立ツ。  $\eta(L_n) > \eta(L)$  トナル  
 様ナ  $n_0$  ガアルト假定シテ矛盾ニ導カウ。  $\{\eta(L_n)\}$  ハ單  
 調非減少ガカラ、 $n \geq n_0$  ナレスベテノ  $n$  = ツイテ  
 $\eta(L_n) > \eta(L)$  トナル。サテ一方テ、 $\delta(L_n/L)$  ガ  
 $n \rightarrow \infty$  ノトキ  $0$  = ナルコトカラ、充分大ナルスベテノ  $n$   
 $=$  ツイテ  $\delta(L_n/L) < \eta(L_n)$  トナル。

従ツテ、 $L_n = L \cdot \frac{L_n}{L}$  ト書クトキ、 $\eta(L)$  モ  
 $\delta(L_n/L)$  モ共ニ  $\eta(L_n)$  ヨリ小トナル。コレハ矛盾  
 デアル。 ( $\delta(L_n/L) < \eta(L_n)$  ナコトカラ  $\eta(L) \leq$   
 $\eta(L_n)$  トラホバナラス。) [証終]

§6.3. 定理1ノ証明: 今  $L$  が無限 = 分解可能

十ラバ、ソレデヨイ。然ラザルトキニハ、 $\eta(L) > 0$  デアル  
 ル (25), (26)。従ツテ補助定理6 = ヨツテ  $L$  ノ素因  
 子ガ少クモ一ツ存在スル。即チ  $\zeta(L) > 0$  トトラネバナ  
 ラス。(86, 1 [1] 参照) 従ツテ  $\{\varepsilon_n\}$   $\varepsilon_n \downarrow 0$  ヲ任  
 意ニ與ヘタトシテ、次ノ如キ分解不可能ノ確率法則列  $\{L_n\}$   
 ヲ定義スルコトガ出來ル。

(i)  $L_1$  ハ  $L = L_1$  ノ素因子デシカ  $\varepsilon \in \delta(L_1) > \zeta(L) - \varepsilon$   
 トシ、且ツ  $L = L_1 L_1''$  トスル。

(ii)  $L_2$  ハ  $L_1''$  ノ素因子デ、シカ  $\varepsilon \in \delta(L_2) > \zeta(L_1'') - \varepsilon$   
 トシ、且ツ  $L_1'' = L_2 L_2''$  トスル。

以下斯クノ如クシテ  $\{L_n\}$   $\{L_n''\}$  ヲ定義スル。

若シ、コノ process = シテ、無限ニ分解可能ナ  $L_n'' =$   
 到達シタナラバ、 $L = L_1 L_2 \dots L_n L_n''$  ト書ケテ、コレ  
 デ定理ハ証明サレタ。

然ラザルトキニハ、無限系列  $\{L_n\}$ ,  $\{L_n''\}$  ヲ得ル。コ

ノトキ明カニ  $\prod_{n=1}^{\infty} L_n$  ハ quasi-convergent デアル。コレ

ヲ  $L' = \prod_{n=1}^{\infty} L_n$  トオク。

(3) 補助定理6 = 依ツテ  $L$  ノ素因子ノ存在ヲ知ル。(更ニ委シ  
 クハ、 $\delta(L) \geq \eta(L)$  トナル素因子  $L_1$  ノ存在モロカル説  
 デアルガコノ事ハ用キ + 1)。従ツテ  $\zeta(L) > 0$  デアル。  
 然ルニ (22) ノ定義カヲ  $\varepsilon > 0$  ヲ如何ニ與ヘテモ  $\zeta(L) - \varepsilon$  ヲ  
 大ナル平均散縮度ヲモツ素因子ガアルワケデアル。

然ル時  $\mathcal{L} = \mathcal{L}' \mathcal{L}''$  ト書カレル。

茲  $\mathcal{L}''$  ハ無限ニ分解可能ナル、何者  $\Pi L_n$  ハ *quasi-convergent* ナルカラ、 $\delta(L_n) \rightarrow 0$  ナリ、他方、定義ニヨリ  $\zeta(\mathcal{L}'_n) < \delta(L_{n+1}) + \varepsilon'_{n+1}$  ナル。今假リ  $\mathcal{L}''$  が無限ニ分解可能ニ確率法則ヲナイトスルト  $\mathcal{L}''$  ハ素因子  $L''$  ヲモツ。(無論  $L''$  ハ單位法則ヲナイトシテ)  $L''$  ハ各  $\mathcal{L}''_n$  ノ素因子ナモアルカラ、 $\delta(L'') \leq \zeta(\mathcal{L}''_n)$  故ニ、 $\delta(L'') = 0$ 、從ツテ  $L''$  ハ單位法則ナラザルヲ得ナイ、コレハ矛盾。

§ 17. [挿記] 定理 1ニ関スル Khintchineノ証明  
ノ概要: Lévyノ証明ニ於テ、吾々ハ平均散縮度  $\delta(\mathcal{L})$  ノ有效ナコトが見ラレルノナルガ、特性函数ヲ主ナル道具トスル Khintchineノ証明デハ、コレニ代ルトギモトシテ  $\mathcal{L}$  ノ分布函数ヲ  $F(x)$ 、特性函数ヲ  $f(t)$  トスルトキ

$$(29) \quad N_a(\mathcal{L}) \equiv N_a(f) \equiv -\int_0^a \log |f(t)| dt \\ \equiv -\int_0^a \log \left| \int_{-\infty}^{\infty} e^{itx} dF(x) \right| dt$$

ヲ考ヘルノナル。但シ、 $f(0) = 1$  ナリ且  $f(t)$  ハ連続ナコトカラ、 $0 \leq t \leq a$  ナル  $f(t) \neq 0$  ナルヲトツテアルトスル。同様ノ注意ハ一々ニ以下述ベナイ。

$\mathcal{L} = \mathcal{L}_1 \mathcal{L}_2$  トスルト、 $N_a(\mathcal{L}) = N_a(\mathcal{L}_1) + N_a(\mathcal{L}_2)$  トナル。(何者  $f(t) = f_1(t) f_2(t)$  ナカラ) 從ツテ  $N_a$  ハ *non-positive* ナコトカラ、 $\mathcal{L} = \mathcal{L}_1 \mathcal{L}_2$  ナラ



バ、 $N_a(\mathcal{L}_i) \geq N_a(\mathcal{L})$  ( $i=1, 2$ ) トナル。

然ラバ、コノイ等式ノ成立スルノハ何時カト云フ問題ガ起ルノデアアルガ、之レハ、次ノ補助定理カラ、ソノ解答ガ得ラレル。

「補助定理. 分布函数列  $F_n(x)$  ( $n=1, 2, \dots$ ) ガ、スベテ、 $\varepsilon > 0$  = 對シテ  $F_n(-\varepsilon) \leq \frac{1}{2}$ ,  $F_n(\varepsilon) \geq \frac{1}{2}$  ナリトスル。ソノ特性函数列  $\{f_n(t)\}$  ガ、或ル  $a > 0$  = 對シテ  $N_a(f_n) \rightarrow 0$  ( $n \rightarrow \infty$ ) ナルトキニハ、 $f_n(t) \rightarrow 1$  (スベテ、 $t$  = 對シテ) トナル。”

或ル  $a$  = 對シテ  $N_a(f) = 0$  ガ成立スルナラバ、 $f(t)$  ノ分布函数ヲ  $F(x)$  トスルトキ適當ナ常数  $a$  ヲトツテ  $F(x+a) = F_n(x)$  トシテ上ノ補助定理ノ條件ヲ満足スル様ニ出来ルカラ、 $f_n(t) = e^{-iat} f(t) = 1$  ( $-\infty < t < \infty$ ) トナルコトガ上カラ得ラレル。従ツテ、

「 $\mathcal{L} = \mathcal{L}_1, \mathcal{L}_2$  トスルト、 $N_a(\mathcal{L}_i) \geq N_a(\mathcal{L})$  ( $i=1, 2$ ) 但シ一般ニハ不等式ガ成立スルノデアツテ、例ヘバ  $N_a(\mathcal{L}_1) = N_a(\mathcal{L})$  トナルハ  $N_a(\mathcal{L}_2) = 0$  即チ  $|f(t)| = 1$  ( $0 \leq t \leq a$ ) 即チ  $f(t) = e^{-iat}$  ( $-\infty < t < \infty$ ) 即チ  $\mathcal{L}_2$  ガ單位法則ニナルトキニ限ル」

コノ性質ハ、 $\delta(\mathcal{L})$  ノ性質ニ對比スベキモノデアアル。シカモ  $N_a(\mathcal{L}_1, \mathcal{L}_2) = N_a(\mathcal{L}_1) + N_a(\mathcal{L}_2)$  ナル關係サヘアリ、特性函数トノ關係モ明瞭デアアル。

Khintchine ノ証明ハ、 $\mathcal{L} = \mathcal{L}_1, \mathcal{L}_2$  ト分解シ、 $\mathcal{L}_1$  ハ分解不可能ニ確率法則ノ積、 $\mathcal{L}_2$  ハ素因子ヲ有シテ

イ確率法則デアル様ニ出ルコトヲ先ツ示シ、次ニ素因子ヲ有シナイ確率法則ハ無限ニ分解可能ナコトヲ示ス事ニ依ツテ証明ヲ完成シタノデアル。ソノ全体ヲ通ジテ基調ヲナスモノハ、上述ノ  $Na(\mathcal{L})$  ノ利用デアル。